

は本学の所属も付記されている等、海外も含めたネットワークの拡大につながっています。

末筆ながら、本セミナーの開催にご支援いただきました肥後医育振興会の皆様へ改めて厚くお礼申し上げます。今後ともご支援のほど、よろしくお願いいたします。

第四十一回九州手外科研究会を開催して

かとう整形外科光の森 理事長

加藤 悌二

本研究会は昭和五十五年に始まり今年令和二年で第四十一回を迎えました。上肢のうち肘関節から末梢で、特に手に関する疾患について討論する会です。会員数は三五九名で、今回は一七二名の参加がありました。例年一、二名の講師を依頼して特別講演を行っておりますが、今回は四名の講師を招聘して各疾患の最先端の知見を披露していただきました。

上肢のうちでも特に手に関する問題は生命機能に影響を及ぼすことは稀ですが、日常生活動作の質の維持に大きく影響を与えます。治療法一つを選ぶにしても患者さんの年齢や、仕事の内容によっては

大きく治療方針を変更することが必要です。手の外科に関しては手術器材の進化もあり、常に新しい治療法が報告され、どの治療が優れているのかを競い合うことが常態化しています。治療法に関しては文字通り日進月歩ですので、本会のような研究会で新しい知識を仕入れて日々の診療に反映させていくことが望まれます。

今回は、北海道済生会小樽病院院長の和田卓郎先生に、病態もまだはつきりしていない上腕骨外側上顆炎について現時点で推奨される治療法についてお話ししていただきました。金沢医療センター整形外科部長の池田和夫先生には、診断困難で治療法選択に悩むことの多い舟状骨骨折の治療に関して、独自の分類方法を基にした治療（現在は池田分類として広く使われています）について講演していただきました。仙台の泉整形外科病院院長の高原政利先生には、野球肘の中で治療に難渋する事の多い離断性骨軟骨炎について、独自の豊富な症例からスポーツ復帰時期やレントゲン診断方法など目から鱗の話をしていただきました。奈良県立医科大学手の外科学教授の面川庄平先生には、細かい靭帯損傷による手の疾患についての講演をしていただきました。

手には多くの細かい靭帯が錯綜しており、どのような診断を基にしてどういう治療をするか、その重要な点を詳しく話していただきました。

一般演題も数多い応募の中から四十二題にしぼらせていただき活発な討論をしていただきました。本研究会は時間通り進行しないことで知られています。研究会の重鎮である大分のA先生は、この会は時間を気にせず納得するまで討論しようといつも言われており、一時間以上進行が遅れることはざらにあります。今回も時間通りには進行しませんでした、活発な討論で大いに盛り上がりました。

実りある研究会を無事に開かせていただいたことを、ご援助いただいた肥後医育振興会に深く感謝申し上げます。今、世間では新型コロナウイルスで国も地方自治体もきりきり舞いしている時期です。本会は二月一日開催でしたが、今思えばぎりぎり無事に開催できる日程で、まさに幸運だったと胸をなでおろしているところです。肥後医育振興会の益々の発展と会員の皆様のご健康を心より祈念いたします。この度のご支援誠にありがとうございました。

